

土御門家・陰陽事件簿

大盗の夜

澤田ふじ子



家・陰陽事件簿

大盗の夜



澤田ふじ子

光文社

澤田ふじ子（さわだ・ふじこ）

愛知県生まれ。愛知県立女子大学文学部卒業。
高校教師などを経て、'73年作家デビュー。
'75年「石女」で小説現代新人賞、'82年「陸
奥甲冑記」「寂野」で、吉川英治文学新人賞
を受賞。「公事宿事件書留帳」「足引き寺閻魔
帳」「禁裏御付武士事件簿」など多数の人気
シリーズがある。近著に「地獄の始末」、「火
宅の坂」、「夜の腕」など。

大盗たいとうの夜よる

土御門家・陰陽事件簿つちみかどけ おんみょうじけんぼ

二〇〇二年七月二十五日 初版一刷発行

著者*澤田ふじ子さわだ ふじこ

発行者*濱井 武

発行所*株式会社 光文社

〒一〇二一八〇一一

東京都文京区音羽一―一六―六

電話 文芸編集部〇三(五三九五)八一七四

販売部〇三(五三九五)八一二五

業務部〇三(五三九五)八一二五

振替 〇〇一六〇一三一―一五三四七

印刷所*堀内印刷

製本所*牧製本

落丁・乱丁本は業務部へご連絡ください、お取り替えます。

図本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権
法上での例外を除き、禁じられています。本書から複写を希望される場
合は、日本複写権センター(〇三―三三―四〇―一三三八)にご連絡ください。

大盗の夜◆目次

鵜塚

137

鬼火

93

夜叉神堂の女

49

闇の猿

7

大盗の夜

181

縞揃女油地獄

227

朧夜の橋

273

あとがき

316

装幀
装画

小暮
村上
豊太

大盗の夜

土御門家・陰陽事件簿

闇の猿

やみのさる

「ゆび、親指が——」

辻占に出かける前、笠松平九郎は高瀬川沿いの一膳飯屋の長椅子に腰を下ろし、楊枝で歯を
せせっていた。

少し離れた席から、老若二人連れの客の一人が、いきなり大きな声をほとばしらせた。

中年をすぎた店の女子衆が、かれらの飯台に、汁物を入れた井鉢を置いたところだった。

「お客はん、心配してくれはっておおきに。そやけど、うちら馴れてますさかい、ちよつとも熱
いことあらしまへん」

前掛けに片襷をした女子衆は、二人の客にやんわり笑いかけた。

「おまえ、なにいうてるねん。わしはおまえの親指が、火傷しようがどうなるうが、そんな心
配してへんわい。これから食おうとしている汁物の井鉢に、おまえの汚い親指が突っこまれてい

るのを、嫌うているんじや。その指で先まで鼻糞をほじくってたか、汚い襟首を掻いてたか、わからへんやないか。それを咎めているんじやわい。この女、ほんまに阿呆やで。ど厚かましさに閉口するがな。店の主、主はいてへんのか。こらつ、出てきて、わしらに詫びの一言もいわんかい——」

若い客の一人が立ち上がり、店の奥にむかつてどなり立てた。

二人は堅気には見えなかったが、そうかといひ、当初から因縁をつけるため、店にきたようすでもなかった。

柳の葉が芽ぶく木屋町（樵木町）筋には、酒屋や炭屋はじめ、各業種の問屋が軒を連ねている。勢い高瀬船の曳き人足や荷負い人足たちのため、手輕に飲食できる一膳飯屋が、あちこちに暖簾をゆらしていた。

さらに木屋町のすぐ東の筋は、鴨川をひかえた先斗町遊廓。そんな店屋が庶民には重宝されていた。

笠松平九郎が軽い腹ごしらえをしたことも、ほかの店と同様、腹を空かした人足やお店者たちのため、汁物など井鉢からあふれるほど満たして、客に出すのであった。

「あの二人、この界限の店のやりようも知らんみたいで、根っからの京者ではありまへんな。若旦那さま、どないしします——」

平九郎はまだ二十五歳だが、安倍晴明を家祖とする陰陽頭・土御門泰栄の京都触頭の一人で帯刀人。触頭とは、土御門家が陰陽師として生業を立てる易者、人相見などの占い師たちを、

統括する役名であった。

土御門家は天和三年、江戸幕府から朱印状をさすけられ、寛政三年四月、全国の陰陽師支配を、法令で許された。占い師や宗教色をもつ芸能者たちに、職札しやくみだ（許状きよじょう）を交付し、配下におさめることになったのだ。

占い師たちは許状を得る代りに、同家に貢納金を上納した。同家はその支配のため、全国各地に触頭を定め、江戸の浜町に江戸役所を構えているほどだった。

今日の昼すぎ、平九郎は上京の東土御門町の長屋をあとにしてきた。

本所の土御門家は、禁裏まわりの公家町ではなく、京の南西・洛外の梅小路村うめこうじむらに、南北四十五間、東西五十間余の屋敷を構えている。

平九郎にぼそとたずねたのは、かれに小者として仕えるかたわら、土御門家に参上して伝衆でんしゆ（使い役）を勤める寛助だった。

「うむ、まあそのようだが、寛助、口出しはまだじゃ。いましばらく見てみようではないか」
儒者じゆしやまげ髻じつとくすがたに十徳姿、脇差をおびた平九郎は、癖のない顔に微笑をきざんで寛助を制した。

店の女子衆は、客の荒々しい剣幕けんまくに驚いて後ずさり、救いをもとめるように、まわりを見回していた。

このときどこから現れたのか、おかっぱ頭をした六歳ぐらいの女の子が、わあっと泣き声を上げ、女子衆の腰にしがみついた。

女子衆は子連れで、この店に働きにきているのだろう。

「お客はん、そないに怒鳴らんと、ちょっとお待ちやす。かわいそうに、小ぢやな子どもが泣いてますがな」

さすがに見兼ね、奥の飯台で飲んでいた粗末な身なりの中年の男が、長椅子から立ち上がった。「子どもが泣こうがわめこうが、そんなわしの知ったことやないわい。てめえはわしに、なにを待てというんじゃ」

「わしは女子衆の言い分も、おききやしたらどないですと、いうてますのやがな」

「ふん、汚い親指を井鉢の中に突っこみよって、言い分もなにもあるかい」

「それはお客はんの思ひすごしとちがいますか。汚い親指親指というてはりますけど、お客はんは十分食べてもらおうと、井鉢いっぱい盛りつけて、持ってきたてはるんどっせ。熱い汁物に親指を突っこまならん身にもなってみなはれ。そんなことも察しなんだら、罰が当たりますわ」

「てめえ、わしが汚い親指を、井鉢に突っこまんとけと注意してんのに、反対にこの店の商いに味方するのかいな。わしに文句をつけるてめえは、どこの誰じゃい」

「わしは名乗るほどの者ではあらしまへん。高瀬船の菰荷を揚げ降ろするただの人足どす」

「ただの人足がわしに説法するとは、出すぎた真似とちやうか。この野郎、生意気な口を利きおつて。一丁、張り飛ばしたるか——」

若い男は、店の商いぶりには納得した。

だが大勢の前で、理詰めで説かれて引っこみがつかず、怒鳴り声をさらに凶暴にさせた。

母親の腰にしがみついた女の子は、若い男の語調に脅え、黙りこんでいた。

「お客はん、無茶をいわはりますのやなあ。このお人、かなんわ」

首に手ぬぐいをかけた人足が、困惑の声でつぶやいた。

「なにがかなんのや。さあ、表に出やがれ。思いつきりぶちのめしてやろうやないか。店の中では存分に暴れられへんさかいなあ」

毗を吊り上げ、険しい顔になった若い男は、人足にまたとなり立てた。

「市松、こんな店で、もうやめといたらどないや」

連れの中年すぎの男が、小声で若い男をなだめにかかった。

「安三の兄貴、今日はどないしはったんどす。あんな荷負い人足になめられ、黙って引っこんでられしまへん」

安三の兄貴と呼ばれた男は、まだなにかつづけたそうに市松を見上げ、つぎには母親の腰にしがみつく女の子に、ちらっと目を走らせた。

だがやはり無駄だといわんばかりに、眉を暗くひそめ、視線をもとにもどした。

平九郎は興味深そうな目で、二人のやり取りを眺めていた。そしてなにに気づいたのか、独り小さくうなずいた。

「人相手相の観相、また算木と筮竹をもちいる易。いずれにいたせ、わが土御門家支配の陰陽師たる者は、ただ人の吉凶を占うだけであってはなるまいぞよ。人は生きるについて、あれこれ迷うものじゃ。そのとき活路を見いだすため、占い師に頼ってまいる。陰陽師たる者は、一人ひ

とりの氣を鋭く察し、当人の氣質を見極め、それに合うた処世の術をさずけてとらせねばならぬ。陰陽師とは、昔はともかく、式神（呪詛の鬼神）を手足のごとく使い、怪しをなすものではない。煎じつめてもうせば、いまでは人の道を説き、当人にすすむべき道を示す尊い生業と心得るがよからう。この旨、あいわかったな」

以前、平九郎は陰陽頭・土御門泰榮から屋敷に召され、父仁左衛門のあとを継ぎ、触頭につけと命じられた。

そのとき壮年の泰榮は、広い邸内にもうけられた西の対の屋から、大きな池の水面をひたひた渡つてくると、植えこみのかたわらにひかえる平九郎に、こういいきとした。

池向こうの対の屋から、真つすぐ水上をきただけに、さすがに泰榮の両足は濡れていた。

池には睡蓮が青い葉を広げ、美しい花を咲かせている。

それらを踏み分けてきた泰榮の狩衣姿は、昔はともかくといいながら、鬼や霊と對話するとさく靈能者そのものだった。

平九郎は思わずあつと目を剝いて低頭した。

「平九郎どの、殿様があのよう冥道の術をもちいてこちらにこられ、そなたにお言葉をたまわるのは、よくよくそなたが、お氣に召されたからでございましょう。亡き仁左衛門どの、土御門家・譜代陰陽師として、忠義一筋のお人でございました」

同家には、家政をつかさどる三人の家司（役人）がいた。家司頭の赤沼頼兼は、許状の発給を取りしきる同家の長老だった。